

令和五年度

中学校B日程入学試験問題

国語

受験上の注意

◎時間 … 五十分

◎解答はすべて、別紙解答欄らんに記入すること。

◎字数制限のある場合、句読点、カギカッコなどの記号も字数に入れるものとする。

第一問題 今から放送による問題を行います。

- ① 問題は全部で四問あります。
- ② 本文を読んだあとで、問題を読みます。どちらも一回しか読みませんから、しっかり聞いてください。
- ③ 左の空らんを使って、メモをとってもかまいません。



第二問題 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

小学五年生の眠人みんとは父の直彦なおひこと関係がうまくいっていない。あるとき、眠人は沖縄から東京へ出てきていた春帆はるほにたのみこんで、沖縄楽器こくごの三線さんせんを教えてもらった。春帆の部屋で練習すると、隣に住む沢見さんに音がうるさいと怒られるので、眠人と春帆は練習場所を公園にしていた。春帆が沖縄に帰ってしまった後も公園で練習を続けていた眠人は、竜征を聞き役に毎日夜八時過ぎまで練習していた。そのことが自分の子どもにも影響えいさつすることを恐れた「銀ぶち眼鏡のおばさん」など数人の下級生の保護者ほごしやから抗議こうぎを受けたことをきっかけにさかいが起こった。そのうちの一人「小太りのおばさん」に腕をつかまれた眠人は反射的に彼女を突き飛ばしてしまったため、警察を呼ばれるさわざになった。野次馬が集まったなか、沢見さんが現れ、眠人や竜征だけでなく、春帆の悪口まで言い始めた。

「ぼくは三線を教わっていただけです。春帆さんは師匠ししやうなんです。変な女子高生なんかじゃありません」

「三線？」と警察官が興味を示す。竜征が「そうだ、そうだ、眠人。言ってみてやれ」と加勢かせいしてくれる。

「ぼくは沖縄の楽器を教わっていたんです」

ベンチに置いてあった三線を取ってきて見せた。銀ぶち眼鏡のおばさんが嘲笑あざわらうように言う。

「結局、遊んでただけじゃないの」

「眠人の三線は遊びじゃないぞ。眠人、みんなに聞かせてやれ。春帆から本気で習ってただって弾ひいて証明してやれ」

「あんたたちなに言ってるの。いまの状況じょうきょうわかってる？ その三線ってやつを夜にここで弾ひいてたのがそもそも問題だったんじゃない。悪いことしてたって自覚じかくがまるでないじゃないの」

銀ぶち眼鏡のおばさんがいきり立つ。①「まあまあ」と警察官がなだめてくれた。

眠人はぐるりと見回した。薄暗うすぐらい中、野次馬を合わせて二十人あまりの人がいて、すべての視線が眠人に注がれていた。好

意的な視線はゼロだ。きつとみんな眠人と竜征を悪い子供と思っている。

また線が引かれていた。線の向こうは正しくて、こっちは悪い。

でもどうしてこっち側の事情を聞いてくれないのか。こっち側の本当を知ろうとしないのだろう。

外で三線を弾いていたのは家では無理だからだ。春帆は変な女子高生などではなく、やさしくて尊敬できる人だ。おばさんたちは親の教育が悪いなんて思っているようだけれど、親に聞かしてはこっちだって被害者^{ひがいしや}なのだ。

事実や事情を知ろうともせず、交^かわされていた本当の言葉たちに耳を澄^すまそうともせず、勝^{かち}手に線^{まき}を引いて正^{ただ}しさで殴^{なぐ}りかかってくる。

殴られる人間にだって心があるのに。

春帆に教^{おし}わった^{※2}うちな^{※2}ーぐちで言えば、くるがあるのに。

立ったまま三線を構えた。「おいおい」^③と警察官が困惑の声を上げるのが聞こえた。野次馬たちが携^{けいたい}帯電話を構える。写真を撮^とるつもりなのだろう。銀ぶち眼鏡のおばさんが目を吊^つり上げて喚^{わめ}いている。小太りのおばさんはほかのおばさんやあとから来た警察官に介^{かい}抱^{ほう}され、落ちてきてきたよう^で申し訳^{わけ}なさそうにお辞^じ儀^ぎをしていた。笑^えみも見える。よかった、大きな怪^け我^がはしていないらしい。

小さく息を吸って、『ていんさぐぬ花』の前奏を弾いた。びびって指が震えそうになる。視線が肌にざくざくと突^つき刺^ささる。でも一音^{ひとね}ずつ丁寧^{ていねい}に奏^{かな}でていく。

沖繩へ帰ることを決心した春帆が、ふたりきりのときに打ち明けてくれた言葉がよみがえった。

「わたしはね、一歩前に進むことが大切だって眠人から教^{おし}わったんだよ。わたしが何度断^{ことわ}っても眠人は三線を教えてくださいって粘^{ねば}ったでしょう。その一歩進もうとする力が、自分を新しく変えていくんだよね。そのことを教えてくれた眠人には感謝^{かんしゃ}してるんだ」

春帆は続けて言っていた。地下アイドルをやっていたときの自分には前に踏^ふみ出^だそうとする力がなかった、と。メジャーの

アイドルになるための一歩目を頑張れなかった、と。でも三線の先生という新たな目標のために、一歩目を踏み出そうと決心したのだそうだ。沖繩に帰るのは高校二年生が終わってからでもよかったはずなのに、居ても立ってもいられなくなって学年の途中で帰った。それほどまでに新たな一歩に燃えていた。

たった一步を踏み出せるかどうか。逃げ出さず、一歩だけ前へ。その大切な行為を三線との出会いのなかで、自分は知らず知らずのうちにしていたのだろう。感謝しなければいけないのはこっちのほうだ。

前奏が終わり、歌が始まる。『ていんさぐぬ花』は作詞者も作曲者も不明でいろいろなバリエーションがある。歌詞は十番まであって様々な教訓を歌っている。一番から三番までは親にまつわる教訓だ。春帆から初めて歌詞の説明を受けたときはぴんとこなかった。直彦なおひこからほっとかれて育ったせいかもしれない。

しかし春帆が師匠になってくれて、相談やたわいない会話を交わすようになってから、歌詞を理解できるようになった。春帆という年上のありがたい存在のおかげで、親の大切さやつながりの深さを想像できるようになったからだと思う。

そして銀ぶち眼鏡のおばさんが激怒するのも、いまの自分なら理解できた。子供のために親は本気で心配したり怒ったりするものなのだ。それはやっぱりうらやましいことだった。

歌うあいだ、様々な感情が心の表面に現れては消えていく。うらやましさ、春帆が沖繩へ帰った寂しさびさ、彼女かのじよがたくさん話を聞いてくれたことへの感謝。それらが歌に彩いろどりを添そえていく。

次第しだいに場の空気が和なごんでいくのがわかった。歌えば歌うほど、向けられている視線がやわらかくなっていく。好奇心全開というふうに見ていた人たちも、楽しい表情へ変わっていく。三線のやわらかい音色と、語りかけるようなやさしい曲調が、みんなを変えていく。

曲は歌う本人の心も救ってくれるようだ。楽器を通して生み出したリズムとメロディーが、自分の心を励はげまし、背中を押していた。不思議なことに視界が広がる感覚がある。耳を傾かたむけている人たちひとりひとりの顔がよく見える。ぐぐつとみんなが前のめりになってきている。音楽には人を引き寄せる力があるのだと知った。

六番まで歌った。春帆が好きだと言っていた六番。歌詞はこうだ。

「なしばなんぐとうん なゆるくとうやしが なさぬゆいからどう ならぬさだみ」
なにごともしなせば成るものだけれど、為さないせいで成らないのだ。

「行動あるのみさあ」

太陽のようにまぶしい笑顔で、まさに沖繩というふうには語尾を上げて言っていた春帆の姿が思い出される。今後この曲を歌うたびに春帆との日々が心に浮かぶのだろう。

そんなことを考えていたら、歌い終えてしまった。竜征が盛大な拍手をしてくれる。ジャンプしながら頭の上で手を叩いていた。つられるようにして拍手がまばらに起こり、ゆっくりと広がっていった。

「あ」

驚いて声もれる。小太りのおばさんが手を叩いているのだ。不良だから夜遅くまで公園にいたわけではないと、真面目に三線に取り組んでいたのだと、わかってくれたのかもしれない。銀ぶち眼鏡のおばさんは拍手をしていなかったけれど、もう睨んではこなかった。

「君たち、話を聞きたいんだけど」と警察官に東屋の隅へ連れていかれた。警察官から質問なんてまずい状況なのに、竜征は気にも留めずに感想を伝えてくる。

「かっこよかったです、眠人」

警察官に気づかれないようにVサインを作った④。

「春帆の沖繩っぽい歌い方もよかったですけど眠人の歌もいいね。まっすぐって感じがするよ」

「ぼくの場合、民謡の歌い方ができないだけだよ」

「それがいいんだよ。ガキがあんまりうまいと鼻につく大人もいるからさ」

わはは、と竜征は声を上げて笑った。

「最初、みんな眠人のことをなんだこの子って顔で見たくせに、だんだん惹きつけられていくのが痛快だったなあ。ほら見たか、遊びじゃないんだぞって、最高の気分だったぜ」

「聞いている人たちの感じが変わったの、ぼくもわかったよ」

「おれは見たよ。眠人が聞いている人たちの心に虹をかけるのが」

また出たよ、竜征のおかしな言い回しが。そう突っこんでやりたかったけれどやめた。今日はそうした言い回しがとてもうれしかったから。

音楽には立場の違いを超えてどんな人にも届く力がある。

春帆のおばあちゃんが語っていたという言葉だ。

自分は本当に虹をかけられたらどうか。聞く人ひとりひとりの心に届く力を、音に宿せたらどうか。

なりたい将来の姿がうっすらと浮かび上がってきた。ひとりひとりの心に届くなにかをする人になりたい。届けられる人間になりたい。

⑤ 虹をかけるのだ。引かれた線の向こう側へ。たとえ世界がどれだけ分断されようとも。

(関口尚『虹の音色が聞こえたら』)

※1 三線

： 沖縄や奄美大島で盛んに使われる弦楽器。三本の弦を爪と呼ばれるバチでかきながらす。

※2 うちなーぐちで言えば、くくる

： 沖縄の言葉で言えば、「こころ」。

※3 東屋

： 庭園や公園に設ける休憩用の小さな建物。

問一 ——線①「いきり立つ」について、次の問いに答えなさい。

(1)「いきり立つ」とありますが、騒ぎが大きくなるにつれて「銀ぶち眼鏡のおばさん」の眠人に対しての感情がますます高まっていったことがわかる表現を、本文中から十五字以内で探し、抜き出して答えなさい。

(2)春帆とのやりとりを思い出すなかで、「銀ぶち眼鏡のおばさん」がいきり立った事情を眠人はどのように考えましたか。「」だから。」が続くように、本文中から二十五字以内で探し、抜き出して答えなさい。

問二 ——線②「勝手に線を引いて正しきで殴りかかってくる」とありますが、どういうことですか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、自分の感情にまかせて言いたいことを言い、まちがいを注意されると強い言葉で反発すること。

イ、自分の子どもに悪い影響があるかもしれない相手が言ったことでも、しつかりと聞こうとすること。

ウ、親の教育が悪いと思う子どもに対してはきびしい言葉でしかり、立ち直るように期待すること。

エ、自分たちの都合だけで善悪を決めつけて、悪いと判断したことについて一方的に責めたてること。

問三 ——線③「警察官が困惑の声を上げる」について、「困惑」の意味は「どうしたらよいか迷うこと」ですが、警察官が三線を構えた眠人に困惑したのはなぜですか。本文中の言葉を使って、三十字程度で答えなさい。

問四 ——線④「Vサインを作って応える」とありますが、このときの眠人の気持ちはどのようなものだと考えられますか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、問題が大きくなったせいで、警察に行くことになり、どうにもできないとあきらめる気持ち。

イ、音楽を聴いた人の反応を見たが、警察官が取り調べをすることがわかり、悲しく思う気持ち。

ウ、警察官もふくめた大人たちが自分の演奏を聞いて感動してくれたことをうれしく思う気持ち。

エ、今は演奏できないが、警察官との話し合いによつては、今後公園が使えるそうだと喜ぶ気持ち。

問五 ———線⑤「虹をかけるのだ」とありますが、これは眠人がどこに何を届けることを言っていますか。本文中の言葉を使って、二十字以内で答えなさい。

問六 眠人に対する人々の反応や行動としてあてはまらないものを次のア～オから二つ選び、記号で答えなさい。

ア、集まった野次馬たちは眠人と竜征が下級生の保護者と争う様子を、事情もわからないまま写真に撮ろうとした。

イ、おばさんたちは、自分たちに反抗する眠人と竜征を遅くまで公園で遊ぶ不良だと考え、ひどくしかつた。

ウ、下級生の親たちは、反抗的な眠人と竜征が将来どう成長するのかを心配したので、彼らをきびしく注意した。

エ、銀ぶち眼鏡のおばさんは三線の演奏を聞いたあと、眠人に対してそれ以上注意することをやめた。

オ、その場にいた人々全員が三線のすばらしい演奏に感動し興奮した結果、盛大な拍手を送った。

第三問題 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

※1
極東に位置する日本は大昔から、中国でできあがった文化や技術の一番いいところを自分たちの暮らしのなかに取り入れてきました。①自国で苦勞して一から生み出さなくても、となりの隋や唐などに行けば欲しいものを見つめることができました。日本は「必要なものがあつたら、すでにいいものを持っている国から持つてきて真似る方が効率的だ」ということを何百年という時間をかけて学んでしまったのです。

その結果、「新しいものを一から生み出すまでには、どんなにたくさんさんの失敗があり、その失敗から学び取った知識やノウハウが蓄積されているか」ということに気づくこともなく、自分でちゃんと考えようともせず②に「結果だけ真似すれば事足りる」という傾向が強くなったのだと思います。

③ さらに江戸時代が終焉を迎える頃から、この傾向はより強くなっていきます。

明治維新以来、日本は当時の先進国である欧米列強に追隨し、その文化や経済、科学技術などあらゆる面で、そのまま真似することが国を進歩させることだと信じるようになりました。

確かに、その成果として、当時の日本は目覚ましいハッテンを遂げました。A、一方で、できるかぎり短期間で真似することを重視するあまり、日本独自の文化や文明を築き上げるための創造性については軽視されました。結果、明治維新以降の日本では、創造性をハグクムような努力は行われず、そのような文化や環境も整いませんでした。

明治維新はほかにも弊害をもたらしませんでした。

「前に「こうすればうまくいく」と決められたことは疑わず、何も考えず、そのままやるのが一番いい」という文化をつくってしまったことです。

④ この「決められたことをしていればいい」という文化は、その後の日本の「教育」に色濃く影響しました。

今の学生が受けている教育の大半は「自分で考えるのではなく、とにかく先生の言うことを聞いて勉強すること」を求めます。その教育を受ける現場である学校の試験問題には必ず正解があり、その正解に早く到達できたひとが良いセイセキをおさめて、

試験に合格することになります。

つまり、日本の小・中・高・大学の受験のほとんどが「優等生の選抜試験」になっているのです。

ただ、「優等生」とは言っても、残念ながら「自分の頭で考えて創造性のある成果を出せる優れた人材」ではありません。「言われた通りの勉強方法で大量の正解を暗記できた記憶力の良い生徒」という意味です。

このような教育のもとで育った優等生たちは、自分の頭で考えることはあまりなく、ただ、頭は「メモリー」として利用され、膨大な知識が詰め込まれています。

大学の入試試験では、求められた答えを「暗記した知識や問題の解き方」のなかから探し出せるかどうかが肝心となります。考える力ではなく、記憶力の良し悪しが問われ、機械的に暗記した膨大な知識や解き方をできるだけ早くアウトプットできる学生が大学入試の勝者となり、卒業後、その学歴を評価されて、社会に出てからも重要な地位を占めることとなります。

学校の先生にとっても、教えた生徒が偏差値の高い有名大学に入ってくれると自分の評価も高まります。結局、生徒たちは、先生から言われるままに、記憶力を試す傾向にあるテストの点数を少しでも多くとれるように、知識や問題の解き方といった

“正解”を暗記することだけに力を注いでしまい、「自分の頭でちゃんと考える」という基本さえ失っていくのです。

⑤ 私は「知識」には二種類あると考えています。

書かれたことや教えられたことを他人事として暗記した机上の空論とも言える「表面的知識」と、自分事として自身の体験から身をもって学んだ「体験的知識」です。

受験では、暗記した解答や問題の解き方などの「表面的知識」をいくつ憶えているかが重要になります。B、社会に出てから求められるのは、暗記した何百もの解決法についての「表面的知識」ではなく、直面した問題それぞれに解決法を組み合わせて応用させるための「体験的知識」の方です。

学生のみなさんも社会に出ると思い知らされることになりましたが、世の中のあらゆる仕事において、学校で勉強した「正解」という唯一の答えが通用するケースはほとんどありません。

学生のなかには、暗記中心の教育に興味を持たず、先生から見えないところで⑥ を出しているひともいるでしょう。しか

し、学校ではどうしても「試験ができて要領のいい子」が先生に重用※8されます。そういう生徒が重用されればされるほど、暗記中心の勉強に疑問を持つ生徒たちは、学校での勉強を諦めるようになります。だからと言って「自分の頭でちゃんと考えること」も教わらないので、そちらもできないままです。

暗記した記憶を思い出すだけで答えが出てしまう入学試験をやっているかぎり、「自分の頭でちゃんと考えることができない人間」の再生産がどんどん進んでいくことになるのです。

まわりのひとたちの言動や世間※9の風潮※10に付和雷同※11するひとたちが増えると、ますます、自分の頭で考えるときの産みの苦しみを避けて、失敗や事故が起きたときに責任転嫁てんかもしやすい「他人の頭で考える」という文化が定着していきます。

こうして、現代の日本には「自分の頭でちゃんと考えよう」という傾向が強く見受けられるようになったわけです。

（畑村洋太郎『やらかした時にどうするか』）

- ※1 極東 …… アジア東部の地域。
- ※2 ノウハウ …… 物事の進め方に関する知識。
- ※3 追随 …… あとについていくこと。
- ※4 弊害 …… 害になること。
- ※5 アウトプット …… ここでは、暗記した膨大な知識や解き方をいかすこと。
- ※6 枢要 …… 最も重要なこと。
- ※7 机上の空論 …… 頭の中だけで考え出した、実際には役に立たない理論や考え。
- ※8 重用 …… 大切なものとしてあつかうこと。
- ※9 風潮 …… 世間一般の傾向。
- ※10 付和雷同 …… 自分にしつかりとした考えがなく、他人の言動にすぐ同調すること。
- ※11 責任転嫁 …… 責任を他になすりつけること。

問一 〜〜線 a と c のひらがなを漢字に直しなさい。 b は送りがなもつけなさい。

問二 A、 B に共通してあてはまる言葉を次のア〜エから選び、記号で答えなさい。

ア、また イ、つまり ウ、そして エ、しかし

問三 ——線①「自国で苦勞して一から生み出さなくても」とありますが、筆者は「自国で苦勞して一から生み出」すことでのようなことがわかると考えていますか。最も適当なものを次のア〜エから選び、記号で答えなさい。

ア、当時の先進国である中国や欧米列強の文化、科学技術のすばらしさ。

イ、学びたいことがあれば、先進国から学んだ方がムダがないということ。

ウ、新しいものを生み出すための失敗から得る、たくさんの方の知識やコツ。

エ、日本だけの文化や科学技術を創りあげていくことの重要性。

問四 ——線②「『結果だけ真似すれば事足りる』という傾向が強くなった」とありますが、日本でその傾向が強くなったのはそもそもどのようなことをしてきたからだか。筆者は考えていますか。本文中の言葉を使って、三十字程度で答えなさい。

問五 ——線③「明治維新以来」とありますが、筆者が「明治維新以来」の例から言いたいことはどのようなことですか。最も適当なものを次のア〜エから選び、記号で答えなさい。

ア、欧米など先進国の真似をすることで、日本が驚くほどの成長をしたこと。

イ、日本では決まったことをしていればうまくいくという文化が作られたこと。

ウ、文化や経済など、あらゆる面で日本は欧米には勝てないということ。

エ、欧米諸国を参考にしていけば、日本独自の文化が作られるということ。

問六 ——線④「『決められたことをしていればいい』という文化は、その後の日本の『教育』に色濃く影響しました」とありますが、その結果、日本の学生や生徒たちはどうなりましたか。本文中から二十六字で探し、抜き出して答えなさい。

問七 — 線⑤ 「私は「知識」には二種類あると考えています」とありますが、次の「知識」はA「表面的知識」とB「体験的知識」のどちらについての説明ですか。それぞれAまたはBの記号で答えなさい。

1、教科書を見て自宅でひたすら覚えた算数の公式。

2、テストの結果をふりかえって気がついた自分の欠点。

3、失敗しないようにコーチから教わったドリブルのコツ。

4、図工の時間に木を切って学んだノコギリの使い方。

問八 — 線⑥ を出している」とありますが、「人をばかにする」という意味になるように、 に体の一部を表す言葉を漢字一字で答えなさい。

問九 本文の説明として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、日本は欧米諸国から見ると東の端に位置し距離が遠いため、文化を取り入れるのが遅れた。

イ、日本は明治維新によって急速に進歩したことで、独自の文化が創りあげられていった。

ウ、これからの日本に必要なのは、膨大な知識や解き方を使って早く正解を見つけ出す力である。

エ、日本では入試のために暗記中心の勉強をしてしまうので、自分の頭で考える人間が増えない。

第四問題 「箱」を見たことがない人に、それがどんなものか、なるべく多くの角度から説明してください。

第一問題 今から放送による問題を行います。

- ・問題は全部で四問あります。
- ・本文を読んだあとで、質問を読みます。どちらか一回しか読みませんから、しっかりと聞いてください。
- ・左の空らんなどを使って、メモをとってもかまいません。

それでは、始めます。

僕がボストン郊外にあるタフツ大学に「居候小説家(ライター・イン・レジデンス)」として在籍していたとき、大学に行く前によくドーナッツを買った。途中の道筋にあるサマーヴィルのダンキン・ドーナッツの駐車場に車を止め、「ホームカット」をふたつ買い求め、持参した小さな魔法瓶に熱いコーヒーを詰めてもらい、その紙袋をもつて自分のオフィスに行った。そこでコーヒーを飲み、ドーナッツを食べ、半日机に向かって本を読んだり、ものを書いたり、訪ねてきた学生と話をしたりした。お腹が減っているときには、車の中でそのままドーナッツをかじることもあった。おかげでそのころ僕が運転していたフォルクスワーゲン・コラードの床には、ドーナッツのかけらがいつもこぼれていた。自慢じゃないけど、シートにはコーヒーのしみだつてついていた。

ところでドーナッツの穴はいつ誰が発明したかご存じですか？ 知らないでしょう。僕は知っています。ドーナッツの穴が初めて世界に登場したのは1847年のことで、場所はアメリカのメイン州のキャムデンという小さな町。とあるベイカリーで、ハンソン・グレゴリーという15歳の少年が見習いとして働いていました。その店では揚げパンを毎日たくさん作っていたんだけど、中心に火が通るまでに時間がかかって効率が悪かった。それを見ていたハンソン君はある日、パンの真ん中に穴をあければ、熱のまわりがずっと早くなるんじゃないかと思って実行してみた。すると揚がる時間もたしかに早くなったし、出来上がった輪っか状のものも、かたちこそ奇妙だけど、かりつとしておいしくて食べやすかった。「おいしい、どうなつとるんかね(駄洒落)、ハンソン?」「うん、これって悪くないですよ、旦那。」というような次第でドーナッツが誕生した。そんな風にさつき見てきたみたいにきつぱりと説明されちゃうと、「おいしいほんとかよ」と眉に唾をつけたくなるけどちゃんとした本に載っていたから本当の話みたいだ。

揚げたてのドーナッツって、色といい匂いといい、かりつとした歯ごたえといい、何かしら人を励ますような善意に満ちていますよね。どんどん食べて元気になりますよ。ダイエットなんて、そんなの明日からやればいいじゃないですか。

『おいしいアンソロジー おやつ』村上春樹「ドーナッツ」より一部抜粋)

問一 この話は最後の段落を「まとめ」と考えると、その前を二つに分けることができます。前半と後半の段落では、それぞれのそのようなことが語られていましたか。これから読むものの中から最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 前半は、筆者のドーナッツにまつわる思い出、後半は、ドーナッツがどうやって誕生したかについての説明。
- イ. 前半は、筆者のドーナッツにまつわる失敗談、後半は、ドーナッツが生まれた町の様子の説明。
- ウ. 前半は、筆者がドーナッツをいかに愛していたかについての話、後半は、ドーナッツが失敗から生まれたことの説明。
- エ. 前半は、筆者がドーナッツから学んだことの話、後半は、ドーナッツが世界で愛される理由についての説明。

問二 筆者がドーナッツを食べた場所として適当なものを次のア～オから二つ選び、記号で答えなさい。

- ア. ドーナッツ屋の駐車場
- イ. 大学にある自分のオフィス
- ウ. 当時運転していた車の中
- エ. キャムデンという町にあった自宅
- オ. ドーナッツ屋の店内

問三 本文中には「おいしい、どうなつとるんかね」の後に「キャム(駄洒落)を閉じる」という言葉が入っています。この駄洒落は、どの言葉と何をかけて言ったものだと考えられますか。解答用紙の形式に合わせて答えなさい。

問四 本文中に「眉に唾をつけたくなる」という言葉がありました。その前後の使われ方から考えたとき、どういう意味と考えるのが良いですか。最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 油断できないぞという意味
- イ. どう考えたらいいかわらないという意味
- ウ. うっかり信じてしまいそうだという意味
- エ. 嘘だと思いたくなるという意味

以上で、放送による問題を終わります。

令和五年度 中学校B日程入学試験問題 解答欄〔国語〕

第一問題（放送問題）

一

二

三

と

をかけている。

四

第二問題

一 (1)

10

(2)

20

10

だから。

二

三

20

10

30

四

五

10

六

第三問題

一 a

b

c

二

三

四

20

10

10

30

五

六

10

20

七 1

2

3

4

八

九

第四問題

受験番号
名前
※ 得点